京都大学防災研究所年報 第 57 号 B 平成 26 年 6 月
Annuals of Disas. Prev. Res. Inst., Kyoto Univ., No. 57 B, 2014

京都大学に所蔵されている自然災害史料の解読と画像化
—弘化四年善光寺地震と天明三年浅間山噴火—

Interpretation and Digital Scanning of Historical Documents on Natural Hazard Collected by Kyoto University

加納靖之・服部健太郎[(1)]・中西一郎[(1)]・岩間研治[(1)]・植草眞之介[(2)]・
五島敏芳[(3)]・福岡浩[(4)]・安国 良一[(5)]・渡辺 周平[(1)]

Yasuyuki KANO, Kentaro HATTORI[(1)], Ichiro NAKANISHI[(1)], Kenji IWAMA[(1)], Sinnosuke UEKUSA[(2)], Haruyoshi GOTOH[(3)], Hiroshi FUKUOKA[(4)], Ryoichi YASUKUNI[(5)] and Shuhei WATANABE[(1)]

(1)京都大学大学院理学研究科
(2)京都大学経済学部
(3)京都大学総合博物館
(4) 新潟大学災害・復興科学研究所
(5)住友史料館

(1) Graduate School of Science, Kyoto University
(2) Faculty of Economics
(3) Kyoto University Museum
(4) Research Institute for Natural Hazards and Disaster Recovery, Niigata University
(5) Sumitomo History Archives

Synopsis

The Zenkoji earthquake of May 8, 1847 occurred at about 9 p.m. at the area of the present city of Nagano (old territory of the Zenkoji Temple), central Japan. The earthquake caused house collapse, fire, landslides, and floods due to landslide dam breach. The 1783 eruption of Mount Asama caused ash fall and debris flow. We interpreted old documents, records, picture maps on the earthquake damage collected by Kyoto University. Summary of interpretation of one document for the 1847 Zenkoji earthquake and six for the 1783 Asama eruption is presented.

キーワード：1847年善光寺地震，1783年浅間山噴火，古文書，古記録
Keywords: 1847 Zenkoji earthquake, 1783 Asama eruption, historical document, historical record

1. はじめに

京都大学には災害に関する多くの古文書・古記録が所蔵されている．これまでに，1847年善光寺地震に関するものとして，7冊の記録，4枚の絵図・かわら版，8枚の陸地測量図（地震後の測量）を確認した．また，1783年浅間山噴火に関するものとして，6冊の記録，1枚の絵図を確認した．これらを活用し，既に報告されている文献記録も含めた文献記録間の比較検討や，絵図等との比較をおこなうことで，1847年善光寺地震や1783年浅間山噴火に関して，より詳細な情報を得ることができる可能性がある．

一方，既存の史料集の問題点として，一部が抜粋して収録されていたり，省略されていたりして，元々の史料から分断された文章が掲載されているものがしばしば存在することが挙げられる．自然災害に関する文献記録では，異なる複数の自然災害が記録されていることや，自然災害と一見無関係な記載がなされていることがある．こういった記載も併せて翻刻・再検討を行うことで，掲載箇所の文脈をより正しく把握し，その信頼性を評価することが可能となる．また，新収日本地震史料など，既存の地震に関する史料集は他の災害に比して充実しているものの，地震以外の自然災害，たとえば火山噴火，高潮，大潮などの記述は少ない．過去の自然災害に関するより多くの情報を得るためには，未発表の文書の翻刻や，既存の史料集に採録されていても省略されている部分の再検討が必要となってくる．

本稿では，京都大学所蔵の1847年善光寺地震および1783年浅間山噴火に関する古文書・古記録のうち，最近翻刻をおこなった6件の文献史料についてその概要を紹介する．

2.　1847年善光寺地震と文書の例

善光寺地震は，弘化4年3月24日(1847年5月8日)夜9時頃発生した．M＝7.4と推定されている．被害は，現在の飯山市・長野市を中心として，長野県北部から新潟県西部に広がっている．震源は浅く，飯山市・長野市に地震断層が出現した．地震動・火災による被害だけでなく，多数の山崩れによる被害，堰止め湖による村の水没が発生した．さらに，虚空蔵山の山崩れによる犀川の堰止め湖が，4月13日に決壊し，さらに被害を大きくした．

ここでは五島ほか(2014)で報告した2件のほかに，京都大学に所蔵されている文献史料1件の翻刻をおこなった．

2.1　「信州大地震前後天災之記事」

五島ほか（2014）で報告した2件の史料の内容と重複しているものも見られる．ただし，一部の表記や数字に違いがあり，書写等の過程で変遷があったことが推察される．今後検討が必要である．

五島ほか（2014）の2件で見られた表現の他，「信州大地震前後天災之記事」において，弘化四年の正月に丹後で平地が突然盛り上がり，田畑に被害が出たことが報告されている．地すべり末端の隆起の可能性もあるがこれを裏づける表現は無い．なお，この被害については，増訂大日本地震史料 第3巻の弘化四年正月の項に掲載されているが，本史料のように御届の形で残っているものは見当たらない．

表題に「前後天災之記事」とあるように，この史料の後半部分には，丹後地方で発生した陥没（「丹後国俵野村外三ケ村変地先届」）や弘化三年七月の京都の洪水など，善光寺地震以外の自然災害や事件についての記事もみられる．

3.　1783年浅間山噴火と文書の例

天明三年（1783年）に起こった浅間山噴火については，これまでにも文献史料を用いた研究が行われている（たとえば，田村・早川，1995; 古澤，1997）．また，内閣府による調査も行われている（内閣府，2006）．この噴火に関しては，文献史料が多く現存しており，浅間山天明噴火史料集成I-V（萩原，1985; 1986; 1989; 1993; 1995）や天明三年浅間山噴火史料集（浅間山麓埋没村落総合調査会，1990）にまとめられている．

浅間山は過去に噴火を繰り返しており，歴史記録等からは685年，887年，1108年，1281年（ただし，この噴火は存在が疑問視されている．例えば早川・中島，1998），1517-1532年，1596-1609年に噴火したことが知られている．1783年の噴火は，日本の火山噴火による災害として最大規模とされている．4月9日よりはじまった噴火活動は，溶岩の流出，火砕流，熱泥流，泥流や，関東一体での降砂，降灰が見られた（田村・早川，1995）．また，吾妻川および利根川流域全体に洪水の被害をもたらした．天明の飢饉の要因のひとつになったとされている．

京都大学大学院文学研究科に所蔵されている文献史料から天明浅間山噴火について記載のある6件を選び出し，翻刻をおこなった．これらの文献史料の概要を述べる．すでに上述の研究や史料集で指摘されている事件，事項も多いが，それぞれの文献史料に記載されている内容を紹介する．

3.1　「見聞書写」

松平阿波守が派遣した役人による報告書の写しである．

3.2　「浅間の記」

女性俳人羽鳥一紅(1724-1795)の手による「文月浅間記」の写しが前半にあり，また後半では，書写者が見た江戸の世相が描かれている

3.3　「浅間山焼候ニ付松平讃岐守見分候者届出ニ書付」

松平讃岐守が派遣した役人による見聞の報告書の写しおよび関連する覚の写しから成る．宝永四年の地震，富士山噴火についての記載もある．

3.4　「浅間山焼大変記」

浅間山に関する伝承，被害人数，件数の書き上げ，「信州・上州・武州灰砂火石用水往還悪水除後普請場所割役」（復旧工事の分担表），物価上昇についての記述から成っている．冒頭の伝承の部分には，弘安四年（1281年）の噴火についての記載もある．川上文庫の蔵書印があり，川上愛之の記名がある．

3.5　「浅間山焼一件」

周辺の村々からの被害に関する報告と調査，および復旧の依頼，届書（報告書）が収録されている．表紙に「天明三卯年七月」との記載があり，収録されている個々の文書も同月の日付のついたものが多い．

3.6　被害・地変の描写

これら5件の文献史料に記載されている被害や地変は以下のようなものである．

(1) 噴火

噴石の噴出する様子が「火石手まりをとることく」（浅間山焼大変記）や，「大いなる火石二十三十飛あかる事，三丈五丈上りて落る，下より飛上る，中て打合くたけ散」（浅間の記）のように具体的に表現されている．また，噴火に際して出た音は「鳴動夥敷大山も崩候程之響虚空ニ鳴渡」（浅間山焼一件）のように巨大であった様子が書かれている．

(2) 火山灰・火山毛

七月五日夜に「厚サ五分程降り」，八日昼までに一坪あたり「弐寸七分余」積もったというように（信州浅間山土砂降り所々書上并はなし），降灰量の時間変化が記されている．また板橋では「三四分」，軽井沢では「大石七尺余も相つもり」（いずれも「見分書写」）などと，地域毎の降灰量の差異もうかがえる．「浅間山焼一件」では，越後や奥州など遠方への降灰記録もなされている．灰の大きさは「長サ四五寸又は二三寸」（浅間の記），色は「色白くして赤み有り」（浅間の記），「笠もみなまくろになり」（浅間の記）などのように，複数の種類の灰が降ったことがうかがえる．

(3) 火山雷

雷電という表現がしばしば用いられている．「昼夜共震動雷電仕」（浅間山焼一件）のように，震動と雷をひとくくりで捉える表現もよく見られた．

(4) 地震

「当月朔日頃ゟ地鳴りものさわか敷御座候所、去ル六日暮方ゟ天地震動おひたゝ敷、」（見分書写），「去ル六日暮方ゟ天地震動雷電厳敷御座候処」（浅間山焼候ニ付松平讃岐守見分候者届出ニ書付）など，噴火活動に伴い地鳴りや地震が起きたことが記されている．ただし，地震と噴火に際して出た音は不分明である．

(5) 土石流

土石流を表す表現として山津浪（浅間山焼一件）などの表現が用いられている．また，「見分書写」などからは，土石流の構成単位が大石，小石，泥などであり，これらが熱湯と一体となって川を流れた高温の火山泥流（hot lahar）に相当するような状況が描かれている．

(6) 物価上昇

「浅間山焼大変記」において噴火前後の米・麦の相場が記されている．

(7) 噂話

浅間山噴火の際に起きた土石流の原因として，浅間山の崩壊だとする他に，草津白根山の崩壊や伊香保温泉の湯が原因という流言が飛び交っていたことが以下の史料からうかがえる．「浅間地のさけ破候とも，又ハ草津の硫黄山ふけ候共又ハいかほの湯端崩れ候共申候へ共」（浅間山焼候ニ付松平讃岐守見分候者届出ニ書付）．ただし，現在のように機械観測や組織的な観察がおこなわれているわけではなく，現代の我々とは異なる解釈により，発生（目撃）した現象について記録し，その原因を推察しようとしたものと考えることもできるだろう．

4.　議論

ここで翻刻した文書の多くは，同じあるいは類似の文書が既存の史料集に収録されている．一方で，これまでに報告されていない文書も含まれているようである．

既往の史料集では，採録の際に，スペースの都合や重複を避けるための配慮等により，一部が省略されている場合がある．しかしながら，複数の文書で一致しない部分がみつかることがあり，また，地震や火山に関する部分のほかにも，災害の様相や社会の状況を記したものなどもあり，全文を翻刻して以後の活用に供することが重要であると考えられる．

5. おわりに

本稿では，翻刻をおこなった史料の概要を紹介したが，翻刻した史料については，全文を文字媒体として公表することによって，今後の研究の基礎データとすることができる．文字情報としていれば，全文検索も可能になり，また文献史料自体の画像等と関連づけることにより翻刻の疑問点などを解決することもできる．このような考えにもとづき，権利関係（著作権，所有権等）が解決できれば，ホームページ等での公開を計画している．

謝　辞

この研究の一部は，京都大学防災研究所共同利用「京都大学に所蔵されている自然災害史料の解読と画像」によって実施した．

参考文献

浅間山麓埋没村落総合調査会・児玉幸多・大石慎三郎・斎藤洋一（1990）：天明三年浅間山噴火史料集，東京大学出版会，1294 pp.

五島敏芳・服部健太郎・加納靖之・中西一郎・植草眞之介・渡辺周平・安国良一（2013）：弘化四年(1847)善光寺地震について，京都大学防災研究所年報，第56号B，pp. 177-179.

田村知栄子・早川由紀夫（1995）：史料解読による浅間山天明三年（1783年）噴火推移の再構築，地学雑誌，104，6，pp. 843-864.

中央防災会議災害教訓の継承に関する専門調査会（2006）：1783 天明浅間山噴火報告書，193 pp.

萩原進（1985）：浅間山天明噴火史料集成I，日記編，群馬県文化事業振興会，372 pp.

萩原進（1986）：浅間山天明噴火史料集成II，記録編(一)，群馬県文化事業振興会，384 pp.

萩原進（1989）：浅間山天明噴火史料集成III，記録編(二)，群馬県文化事業振興会，381 pp.

萩原進（1993）：浅間山天明噴火史料集成IV，記録編(三)，群馬県文化事業振興会，343 pp.

萩原進（1995）：浅間山天明噴火史料集成V，雑編，群馬県文化事業振興会，354 pp.

早川由紀夫・中島秀子（1998）：史料に書かれた浅間山の噴火と災害．火山，43（4），pp. 213-221.

古澤勝幸（1997）：天明三年浅間山噴火による吾妻川・利根川流域の被害状況，群馬県立歴史博物館紀要, 18, pp. 75-92.

武者金吉（1943b）：増訂大日本地震史料第三巻．文部省震災予防評議会，933 pp.

（論文受理日：2014年6月11日）